

応用心理学の研究領域におけるアナクロニズムとシンクロニズム

大 村 政 男 *

Anachronism and Synchronism in the Field of Applied Psychological Studies

Masao OHMURA *

The Purpose of this article was to review and criticize basic thoughts reflected in the field of recent applied psychological studies from the following six points of view.

1. "Character" apprehended as enveloped deeply in Temperament versus "Personality" as social and personal appearance.
2. Methods of Clinical Assessment versus traditional or long-used Questionnaire Methods.
3. Descriptive statistics versus Statistical inference.
4. "Typology" based on European Characterology versus "Trait theory" rooted American Pragmatism.
5. Elemental view versus Holistic view.
6. Psychology versus Blood group-Anthropology.

key words: Anachronism Synchronism Applied Psychology

序 論

わたくしたち（大村・浅井・花沢，1958）はかつて「パーソナリティ研究におけるアナクロニズムとシンクロニズム」という口頭発表をおこなった。この研究発表は抄録になっているが，次の3節に分かれている。加筆して掲載しておこう。

A. パーソナリティに関する研究は心理学研究のどこにおいても見出され，しかもどこにおいても発見することができないといっても過言ではないであろう。パーソナリティの概念についての討論はすで

に封印され，研究者自身の恣意的なものになっている。体質論的立場に拠っている研究者が「パーソナリティ」を遣うとなんとなく奇異な感じがする。

B. 研究の様式としては質問紙（アンケートを含む）の集団の実施が首位を占め，それに構造化検査の集団の実施が続いている。すなわち，パーソナリティ研究の大部分はトロール漁業的なデータ収集に終始しているのである。

C. 広汎なパーソナリティ研究において，質問紙や構造化検査の多量な使用は，*nomothetic*（法則定立的）な面を指向してはいるが（“*Scientia non est individuorum*”），推計学的処理の未熟によってその研究者好みの結論が導き出されている。

* 文京女子大学
Bunkyo Women's University

この回路は約 40 年後になっても改善されていないのである¹⁾。

ここで、わたくしたちが強調したかったことは、パーソナリティ研究が大量生産的な時代に適合することなしに、つまりシンクロニズム (synchronism) に陥らないで、古い時代の思索、すなわち、アナクロニズム (anachronism) といわれるかもしれない、相対的には時代錯誤的な思索回路をとってもいいのではないかということである。

そのころ、わたくしも若かったので勝手なことをいってしまった感があるが、発表のなかで指摘したことうちのいくつかは、いまでも痛切に感じている。1958 年時よりも量において増大し、その強度においても増加しているくらいである。そこでこの論文の題名も「応用心理学の研究領域におけるアナクロニズムとシンクロニズム」とした。ただ、非常に残念なことは、わたくし自身もあの『西遊記』のヒーローのように大きな手掌を脱け出すことができなかったことである。わたくしはいまコンフリクトのど真ん中にいる。多くの研究者もわたくしの周辺にいるように思う。

I 性格 vs パーソナリティ²⁾

現代社会における心理学的な話題は「性格」に集中している感がある。そのような時代のムードと関連しているのが「コロロジ・テスト (雑誌心理テスト)」の流行であり、一部の心理学者が強調している「性格は変わる、変えられる」³⁾ という希望的観測である。性格をどのように規定するかによって変わるとも変えられないともいえるから、そのような観測はただちに否定できないが、そういう主張をしている人たちが、状況によって容易に変容しないところを見てもかれらの論点は信頼できない。わたくしの性格論はここで開陳するが、性格のある面は変えることができるが……と思っている。

性格を主要な研究テーマとしている心理学者は概念の曖昧性に振りまわされている。そしてついにそれは既知のこととして封印し、前進している。それはそれでいいのかもしれないが、自分の立場も曖昧にしてしまっているのである。

わたくしは性格を決定するのは脳だと思っている。脳の持つ未知のシステム (G. W. Allport のいう“unexplained entity”) が生得的な素質のすべてで

あると思う。この素質は個体に配付された 24 個の数字が書いてあるビンゴカードと考えることができる。そして、そのカードとは関係なく数字が書いてあるボールが球形の籠から飛び出してくる。これが環境刺激である。穴が 1 つだけ空いても上がりにはならない。縦・横・斜め、どれでもいいが直線状に穴がそろえることが上がりの条件である。個体の持っている生得的な素質と環境刺激とはこのような関係にあるものと考えられよう (ビンゴ理論)。

気質は脳の持つ未知のシステムと深い関連があるが、気質と性格との関連もビンゴ的なものだと思う。性格はたしかに気質の層の上に、「刻みつけられたもの」ではあるが、それらはミックスされて情意と呼ばれるような層になっているのではないだろうか。一般に気質の上層に性格が構築されるというが、この 2 つの層は渾然とした情意層で、人の心的活動の源泉になっている。渡邊徹はそれを「力の感」とし⁴⁾、千葉胤成は「感情優位」といっている⁵⁾。心理学では意志という概念をよく使うが、意志は感情の尖鋭化したものと考えたらどうだろうか。「感情の錐」なのである。

それでは「パーソナリティ」とはなんだろう。パーソナリティはやはり社会的なペルソナにほかならないと思う。ローマのキケロ (Cicero) の悩みは現代人の悩みでもある⁶⁾。ペルソナはユングにおいても自我の社会的な隠れ蓑になっている⁷⁾。

脳の持つ未知のシステム、気質と性格が構成する情意の層、そしてペルソナ/パーソナリティの層が人間 (person) の心的構造ということになる。これを図示すると、次の Figure 1 に描かれたいささ

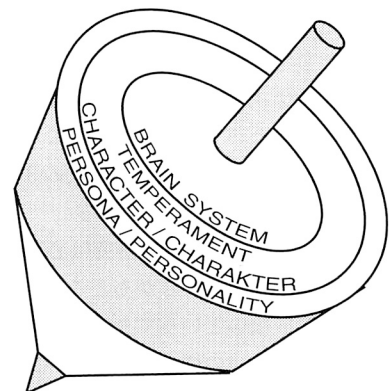


Figure 1 人間の心的構造

か不安定な独楽になる。

状況によってさまざまに変容するというのは、心的構造の外郭になっているペルソナ/パーソナリティという社会的な層なのである。脳のなかに内蔵されている認知的機能が、ある状況でどのように反応すればよいかを決定していく。

わたくしは、かつて浮谷秀一と「情動年齢」を研究したとき「認知力潜水艦」というものを描いたことがある⁸⁾。Figure 2 がそれである。これはもちろん「原子力潜水艦」を捩ったものである。認知的機能の本態をつかむことはできないが、この潜水艦は状況によって、多様なペルソナ/パーソナリティを打ち出すことができるように設計されている。知的に振るまってはいけないところでは自分の本来の知的レベルを抑制するし、外向的に動いたほうが効果的な場合には活発に外界にはたらきかける。それがペルソナ/パーソナリティの機能なのである。性格心理学はこのような状況変貌的なペルソナ/パーソナリティを標的にしても仕方がない。

性格研究の最も重要で、かつ最も頻繁に使用されている道具の質問紙は、たいてい3件法(Y, N, ?)で、ある有名な質問紙には、「あまり考えすぎると決められなくなりますから大体の感じですばやく書いてください」という指示が与えられている。また、ある質問紙には「あまり深く考えずに、はじめに思いついたことをそのまま答えるようにしてください。こまかい点にこだわると答えにくいものです」という指示が与えられている。

これは顔以外に個性のはっきりしていない、状況

によってさまざまな反応をする人から「個性を叩き出す」工夫にはかならないと思う。わたくしはあるとき「あまり迷わず決心がつく」というアイテムに対してじっくり考え込んで、Yを○で囲んだ学生を見たことがある。また、「銃に実弾が入っていると弾を抜くまで気がきでない」というアイテムを含んだ質問紙を見たことがある。バーチャルな場面で個性を叩き出そうとしているのか、それとも „ganz amerikanisch“ なのだろうか。

II 問診法 vs 質問紙法

性格質問紙がはじめて心理学の世界に登場したのは第1次大戦にアメリカが参戦したときである。膨大な数の志願兵のなかから、戦争神経症を起こしやすい素質を持った人を早期に発見するために、ウッドワース(R. S. Woodworth)が中心になって構成した『個人資料用紙(Personal Data Sheet)』がそれである。この質問紙はその後しばしば出現する「情緒不安定性検査」や「神経質検査」のモデルになっている⁹⁾。神経症患者が顕わしている症状やその人の発病前の行動特徴から多数のアイテムが収集され、質問紙が作成されたのであるが、それではどぎつくなってしまうので、質問紙の名称だけは『個人資料用紙』というようなソフトなものになっている¹⁰⁾。

このような質問紙は、実用主義を標榜するアメリカのすこぶる便利な産物で、気質・性格などといった情意層の研究に不可欠なものになっている。

しかし、性格心理学の研究はここで大切なものを

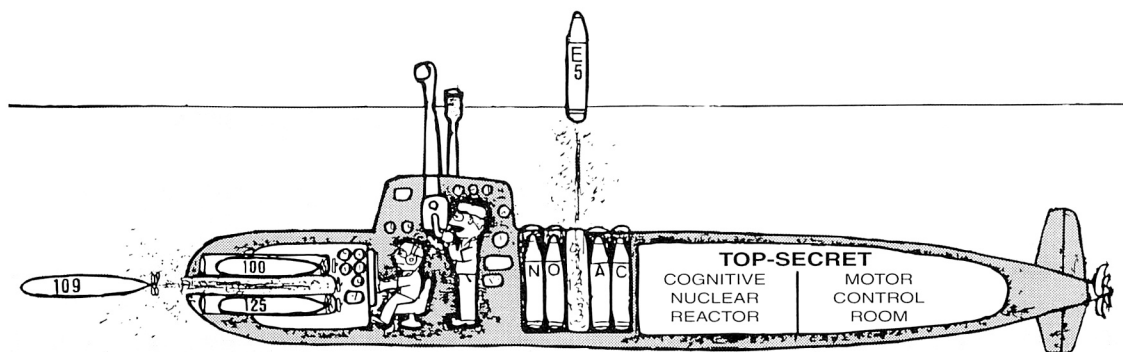


Figure 2 認知力潜水艦の構造 (1997年、日本心理学会第61回大会時に会場で配布)⁸⁾

— いま、109レベルの知能とレベル5の外向性で対処しようとしている —

失ってしまったのである。それは問診法時代に専門家が持っていた「診断の KEY」を相手である被験者に手渡ししてしまったことになるからである。あるアイテム、例えば「あたまが良くなったり、悪くなったり決まらない」、「衝動的である」、「いつもなにか刺激を求めている」などというような意味深長なアイテムに対する回答も素人である被験者の勝手な判断に委ねられる様式に変容してしまったのである。問診法のような注意深さは消え、大量生産の時代に入ることになる。まさに „ganz amerikanisch“ である。

被験者の回答はやがてコンピュータによって処理され、因子分析法などによって脚色され、立派な研究に成長してしまう。それでいいのだろうか。それでいいのである。それこそ現代的なのである。

わたくしが講義を持っている女子大学に、ある大学の院生がデータを収集しにやってきたそうである。趣旨も説明しないでワープロで打った誤字が目立つ質問紙を配布し、学会の発表が迫っているので急いでくださいと急^{せか}して回収し、風のごとく去っていったという。その院生の発表がどうであったかは聞知していないが、若い学生たちにとって反面教師だったことはたしかなことだと思う。

III 記述統計 vs 推測統計

わたくしが学生時代に学習した心理学統計法は田中寛一による記述統計法である。田中はすでに偏差値を活用し、T score の T は、Thorndike, Terman, Tanaka の T であるといったことがあった。田中の統計法は、教育測定を基幹とした記述統計であったので、推測統計学（推計学）を印東太郎から教わったときは非常なおどろきを感じた。ただ、この非常に便利な推計学的方法が、現在、いや、いまから 40 年ぐらい前においても乱用されている嫌いがある。最近はいわゆるレフリーペーパーといわれるもののなかにもそれが見られる。どうしたことであろうか¹¹⁾。どこにヒューマン・エラーが存在したのであろうか。

岩原信九郎はその著書『教育と心理のための推計学』のなかで次のように述べている¹²⁾。

「統計法は取り扱われる集団が既知のときと未知のときとでそれぞれ記述統計 (descriptive statistics)、統計推理 (statistical inference) に区分され

る。一般に母集団は未知のことが多いので記述統計より統計推理のほうが大切である。しかし、記述統計の知識なくして統計推理は不可能である (後略)。」

現代の若い研究者は記述統計法の過程を通過していない。もっぱら推測統計法の世界で生きている。そこから大きな問題が生じてくるのである。

第 1 の問題点は危険率に対する考え方である。これは当然帰無仮説に対する認知に関連してくる。すでに多くの研究者が熟知していることだが、推計学の思考過程を展望してみよう。

(1) 問題を設定し仮説を立てる。この場合の仮説が実験仮説 (H) である。

(2) 母集団の分布型を想定する。この過程には、直観、過去の経験・類推などが参加してくる。

(3) 推計学的仮説を作る。これが帰無仮説で H_0 で表わされる。この仮説はいずれある危険率のもとで棄却される運命を持っている。

(4) 実験法や調査法などを計画する。

(5) 標本を抽出する。母集団を代表するような標本が抽出されなくては研究はすでに失敗である。

(6) ある一定の危険率のもとで帰無仮説を検定する。これが棄却検定である。

(7) 結果を心理学的な立場で検討する。推計学は数理的処理で、それだけでは心理学的な見解にはならない。

(8) 心理学的に疑問がなければ結果を母集団に及ぼしていく。

この過程のすべてが重要であるが、特に引っかかりやすいのは (6) の棄却検定であろう。増山元三郎はかつて基礎医学では $p < .01$ 、臨床医学では $p < .05$ という規準を設定したが、心理学では生命維持の不安に苛まれることはないから $p < .05$ あたりで済ませたらいいのではないかと思う。

心理学研究における危険率の用法について考察してみようと思う。そこには明らかな誤用が見られるのである。

(1) $p < .05$ というのは 95% の有意性を意味するものであるというよりは、帰無仮説が正しいのに誤って棄却してしまう誤謬、すなわち、第 1 種の誤謬 (α) を犯してしまう危険率を意味するものである。第 2 種の誤謬 (β) というのは帰無仮説が正しくないのに、それを採ってしまう危険率である。ただし、現在の推計学は α を用いて構成しているの

β を使用することはない。

$p < .05$ は $\alpha .05$ であり、帰無仮説が正しいのに棄却してしまう危険率を意味するのであるが、このレベルの設定は研究者の自由になっている。最近、 $p < .001$ とか $p < .0001$ というような危険率を用いているレフリーペーパーを見るが、著者もレフリーもなにを考えているのだろうか。そのような驚天動地の危険率を持ち出してものをいう必要はどこにもないのである。どこからどのようにして標本を抽出したのか、そこは等閑視されていて「終わりよければすべて良し」では困惑してしまう。また、それとは反対に $p < .10$ というような危険率を持ち出す人もいる。せっかく苦労して採ったデータなのでもったいなくなってしまったからであろうか。100回のうち10回は——というのはたしかに良好な意味のレベルかもしれないが、それなら思い切って $p < .17$ あたりまで許容してしまったらどうであろうか。心理学の法則は物理学の法則と違ってそう普遍的な妥当性を持っているものではないから……¹³⁾。増山はダイスでも投げたらどうかといったことがある。標本抽出の過程は、心理学研究の慣例として黙認してもかまわないと思うが、危険率のレベルには留意してもらいたいものである。

(2) 帰無仮説と危険率に関する解釈の誤謬は、2群の平均値の差の検定にもしばしば現われてくる。

ある不安検査を一般の高校生と非行少年に実施したとしよう。被験者の人数が適切で標準偏差に差がなければ、平均値における2,3点の差でも、 $p < .05$ レベルの有意差（普通の t 検定）を認めることができるのである¹⁴⁾。すなわち、両側検定にせよ、片側検定にせよ、帰無仮説は棄却されるのである。しかし、両群の点数分布は広汎なオーバーラップを見せていて、その検査は法則定立的にはかろうじてなんとかなるかもしれないが、個性記述的 (*idiographic*) にはまったく役に立つことはない。

研究者は平均値と標準偏差だけにとらわれて全体を見ない。平均値を中心とした68.26%あたりの領域が、あるいは平均値だけが研究者の関心をそそることになる。

(3) 心理学の領域における推計学の利用で最近考えさせられる問題は、相関係数 (r) の解釈の誤謬である。相関係数の解釈は非常にデリケートである。かつてギルフォード (J. P. Guilford) やギャレット (H. E. Garret) の基準が使われていたが、最近是用いられていない。それに代わって、 $+ .25$ $p < .01$ とか、 $+ .75$ $p < .001$ というような記述が見られ、それによって相関係数の解釈がなされている。ここで、 $+ .25$ $p < .01$ というのは、母集団における相関 (ρ) が0でないことを意味しているにすぎない。すなわち、 $+ .25$ というような相関は風前の塵のような係数ではあるが、 $\rho = 0$ という帰無仮説が $p < .05$ で棄却されるということだけの話なのである。 $+ .25$ という相関が、2つの事象の積極的な関係を保証しているわけではない。しかし、そのような解釈をしない人も多く、レフリーが気づかないうちに学術誌に掲載されている。

どうしてこのような未熟な研究者が増えてきたのであろうか。それは相関の様相を眼で見ていないからである。スキャタ・ダイアグラムを見ていないからそうになってしまう。スキャタの状態は Figure 3 に示しておいたが、それを見れば $+ .25$ の意味がよく認知されると思う。先に岩原の意見を引用したが、記述統計法の過程（課程とといったほうが適切か）を通らないで、推測統計法の世界に飛び込み、さらに多数の変数をコンピュータのなかに叩き込んで、あとはプログラムまかせといった研究様式の弊害がここに露わになった感が強い。このように考えるのは天邪鬼的な思考であらうか。

Table 1 ギルフォードの基準

±.20 以下	相関はほとんどない。
±.20～±.40	相関はわずかにある。
±.40～±.70	相関はいくらかある。
±.70～±.90	相関はかなり高い。
±.90以上	相関は非常に高い。

Table 2 ギャレットの基準

±.20 以下	無関係、無視してよい相関。
±.20～±.40	低い相関。
±.40～±.70	著しい相関。
±.70以上	高い相関。

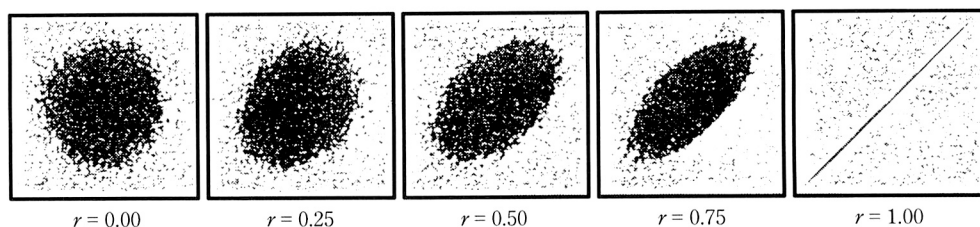


Figure 3 相関のスカッタ・ダイアグラム

IV 類型 vs 特性

質問紙の発達（種類だけの発達だが……）とコンピュータの活発な利用は、性格特性の研究を促進させ、性格の類型にも工夫がこらされるようになった。一番巧妙なのは「矢田部ギルフォード性格検査」であろう。「Y-G 性格検査」と略称されるこの検査は 1957 年に発表されたときは現在のようなプロフィール・パターンを持っていなかった。それが現在のような A (Average)・B (Black List → Blast)・C (Calm)・D (Directory)・E (Eccentric → Escape) という主要な 5 類型に位置づけられるようなスマートな検査に変貌してしまったのである。

Y-G 検査のような因子論的質問紙はその特性群の構成から類型を作りやすいが、因子の安定性についてはしばしば疑問が投げかけられている。比較的有名なある不安検査は、5 因子から神経症的な不安にアプローチしているが、再度因子分析にかけてみると質問紙上に配列された因子が抽出されないのである。それでもその質問紙は検査や診断の価値を失うことはない。有名な質問紙であればあるほど、その質問紙を用いた研究は高い評価を獲得している。特に、わが国では外国人のネームを冠したものや外国産のものに人気がある。女性のブランド志向に似ている。もしも MMPI の最初の M が Minnesota でなくて Morioka だったらどうであろうか。

心理検査、特に質問紙の外国依存は正統派的な様相であってそう問題にならない¹⁵⁾。ただ、特性の集合としての類型については考究する必要がある。

性格研究でしばしば使われている類型には 3 種の型がある。すなわち、**A**：思索抽象された類型、**B**：臨床記述された類型、**C**：計量収束された類型がそれである。これらは相互に独立したものなのであるが、混沌としたものになっている。そういう曖

昧さは払拭しなければならないと思う。

A：思索抽象された類型とは、主として哲学者たちが「人間とはなにか」について考えた結果と思えばいいと思う。ディルタイ (W. Dilthey) の官能型・英雄型・瞑想型や、シュプラング (E. Spranger) の „Lebensformen“ に基づく 6 類型（経済人・権力人・社会人・宗教人・審美人・理論人）がここに含まれる。アメリカの心理学者たちは、この „Lebensformen“ を『価値の研究』という心理検査にしてしまった¹⁶⁾。哲学者の思索から生まれた優れた人間観もアメリカの心理学者によっていたって平凡な心理検査に変身している。

B：臨床記述された類型とは、精神医学者や精神分析医の診断や洞察に基づく類型である。クレッチマー (E. Kretschmer) の „Körperbau und Charakter“ やシュナイダー (K. Schneider) の „psychopathischen Persönlichkeiten“ がそこに含まれている。クレッチマーの類型は質問紙になり、シュナイダーの類型は問診法になっている¹⁷⁾。彼の類型は無体系なことで知られている。サリバン (H.S. Sullivan) の類型も無体系である。フロイト (S. Freud) の口唇性格や肛門性格などの類型は幸いにも心理検査になることをまぬがれている。

心理検査は、性格検査にしる、知能検査にせよ、行動の見本についての測定である。そこで、類型の原作者？と検査の作成者が異なっているとき、原作者の構想と検査との間に大きなズレが生じる場合も出てくる。ユングの向性理論もアメリカで社会適応の指標でも測定するような検査に変貌してしまった。

C：計量収束された類型とは、質問紙の大量投与と因子分析法によって構成されたアメリカ的・実用的な類型である。Y-G 性格検査の類型は、そのスマートなネーミングと、検査自体が学校の授業時間内にうまく収まる容量のよさで軽便である¹⁸⁾。ただ

この検査は、現在、1957年時代の得点分布でプロフィール・メイキングをおこなっている。粗が露呈しないのは5段階点の決め方が、正規分布の百分比にしたがっているからであろう。このような技法を使えば、ギリシア・ローマ時代に作成された質問紙も現代において使用に耐えるかもしれない。

Y-G検査のアイテムがいつのまにか変わっているのが目に付く。「人から触れられたくない秘密がある」、「もっと違う境遇に生まれたかったと思う」、「わざと除け者にされたことがたびたびある」などは消えている。これらはすべて協調性に関するアイテムであるが、協調性の得点分布は微動もしていない。さらに、Y-G検査の12特性に疑問を投げかける人々もいる。わたくしもそう思っている1人であるが、すでにこの12特性は完全に1人歩きをしているのである。もう因子分析の結果の普遍妥当性などどうでもよくなっている。そのどうでもよくなっている12特性を利用した研究が横行しているのである。これはMMPIにおいてもいえることである。あの摩訶不思議なアイテムとK点と呼ばれる修正点を持っている550項目に及ぶ巨大な検査は、アメリカ産であるところに価値があるようである。

類型のAはローラッヘル(H. Rohrer)のいう「ある群の持つ特徴をそれだけ純粋に持つ人間像」のことである。類型(type)というよりはモデル(model)といったほうがいいと思う。理念型といってもよい。ヨーロッパの哲学や性格学に多く見られるのでヨーロッパ型ともいえるものである。

類型のBとCはローラッヘルのいう「ある群の持つ特徴をより多く持つ人間像」である。性格研究でしばしば使われる類型はこれである。きわめて現実的なもので、現実型といってもよい。精神医学者が記述する類型やアメリカの性格研究に多く見られるので、アメリカ型ともいえるものである。

アメリカ型と違ってヨーロッパ型は中世の哲学に深いルーツを持っている。スコラ哲学において論じられた「個々の教会」vs「見えない教会」にルーツを持っているのである。哲学者たちは、個々の教会の力、例えば自主性とか独立性などを認めるのか、それとも「見えない教会」というものの権威を認めるのかということについて論議したのである。この議論は次のような流れになっている。

(1)「見えない教会」的な立場は、普遍が個物に

先立って存在するという考え方(概念实在論)である。普遍は概念的に存在するという考え方は、ローラッヘルの理念型に通じるものと考えられる。

(2)「個々の教会」的な立場は、普遍は名目にすぎない、実在するのは個物だけであるという考え方(実際的な名目論)である。

アメリカ心理学はこのような哲学的思索の歴史を持っていない。機能主義の胎動以来、性格研究は実的なものになっている。この構想からさまざまな心理検査が誕生してくる。コンピュータによって見事に操作され、会社の人事課員が珈琲を飲んで待っているあいだに多数の受験者の結果が打ち出されてくるというメカの時代が出現しているのである。

V 要素 vs 全体

わたくしが進学適性検査や職業適性検査の仕事に接したのは1948年ごろである¹⁹⁾。それ以来、数多くの適性検査の標準化作業に参加してきたが、能力検査と性格検査を結合した理想の検査が誕生しても、要素主義的な観点は失われていないのである。約50年のあいだわたくしの印象に残った問題について触れてみよう。

(1) アメリカの強い影響で導入され、一時的に盛況をきわめた進学適性検査は、学力検査重視の風潮に圧されて消えてしまった。日本人の哲学のなかに進学適性という思想がなかったといえばそれまでであるが、「無用の長物」として捨て去られてしまったのは惜しいことをしたと思う。ただ国立大学で使用された進学適性検査は、創造性のレベルの高いシンクタンク集団が問題の作成に当たったため、深度を重視するきわめて凝った問題になってしまった。文系向きか、理系向きかという進学適性の妥当性よりも問題作成の楽しみのほうが優先した感ある。それよりも大学教育への知的な適応が成功裡に進行するかどうかという大きな問題が横たわっているのに、心理学者は測定することに対する興味が強く、妥当性の様相についてはほとんどかかわっていない。それは企業関係の適性検査において特に著しいと思う。コンピュータから打ち出された記録を相手に渡してしまえば、それでもうお仕舞いなのである。妥当性は「人秘」に隠されて出てこない。

(2) わたくしが最後に接した適性検査は、フラナガン(A.B. Flanagan)の『適性分類検査(FACT)』

である。この検査は Table 3 にあげられている 24 種の下位検査の成績によって、28 領域にわたる職業活動を査定しようとするものである²⁰⁾。

パイロットでは、弁別・立体構成・スケール理解・眼と手の共応・判断と理解・図形認知・機械操作という 7 種の下位検査の結果が吟味される。これに対して、心理学者・教師・ソーシャルワーカーはどうだろうか。かれらに必要な能力は、判断と理解・表現理解の 2 種だけである。

一般職業適性検査で、パイロット（おそらくジェット・パイロットであろう）や心理学者までの能力を測定しようとするのはもちろん見当外れのことなのであるが、このような思想は一般的であって決して珍しいことではない。

(3) 1935 年ごろの出来事だったと思う。ある大きな少年鑑別所で性格（情意徴標という）記述に特注のゴム印を用いたことがある。その鑑別所では 14 種の情意徴標が普通の状態にあるか、固有・偏倚・異常という状態のどのレベルにあるのかを、それぞれの非行少年について問診していくのである。抑うつ性が固有のレベルで、爆発性が偏倚のレベルにあったとしたらどのように診断すべきかについて、それぞれ詳細なマニュアルができていた。そこ

で個々の少年について書類を作成する必要がなく、特注のゴム印を組み合わせて捺印すれば済むことになる。このような手続きは決しておかしいことではない。コンピュータの一般化が進捗していなかった時代である。しかし、それがマスコミの眼にとまり、安易な鑑別診断だとして叩かれてしまった。その鑑別所ではその診断方式をただちに中止してしまったことはいうまでもない。²¹⁾

そのとき使われた特注のゴム印は現代ではコンピュータに替わっている。わたくしは同僚の研究者たちとある適性検査を作成した。その検査は能力検査と性格検査から構成され、それぞれの検査はバッテリー方式でさらにいくつかの下位検査に分かれている。これらは専門家が作成したプログラムによって、どのような得点配置になっても的確な診断ができるようになっている。この程度の操作は多面的な適性検査ならどれでもやっているごく一般的な手続きである。プログラムは現代のゴム印のようなものであるが、マスコミの矢面に立たされることはない。多くのプログラムは要素主義の観点に立っている。いくつかの能力や特性の要素的な組合せで適性診断がおこなわれているのである。

(4) 要素観に対して全体観が主張されることがあ

Table 3 フラナガンの『適性分類検査(FACT)』における能力と職業の関連

職業	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
下位検査	パイロット	店員	歯科医	機械工	機械工	手作業	会計士	芸家	製図工	建築工	生物学者	事務担当者	薬剤師	電気技師	法律家・弁護士	医師	鉛管工	農場主	数学者	看護婦	物理学者	印刷工	販売人	秘書	ジャーナリスト	ソーシャルワーカー	教師	心理学者
1 弁別	●	●	●		●	●			●													●						
2 記号照合		●					●																					
3 記号記憶		●					●					●			●	●				●			●	●	●			
4 手指運動			●		●	●		●						●								●						
5 立体構成	●		●	●	●	●		●		●				●			●	●										
6 スケール理解	●	●		●					●		●		●			●			●	●	●							
7 眼と手の共応	●		●		●		●		●			●	●	●	●	●	●		●	●	●	●			●	●	●	●
8 判断と理解	●		●	●			●				●	●	●	●	●	●			●	●	●	●			●	●	●	●
9 算数推理		●			●		●			●		●											●					
10 形態模写				●		●		●	●	●																		
11 図形認知	●		●	●		●		●	●		●			●	●		●											
12 統計表理解		●					●						●									●						
13 機械操作	●			●	●	●				●	●						●	●										
14 表現理解											●	●	●		●				●		●		●	●	●	●	●	●

るが、それではどうすればいいのかということになるとなんらなすところがない。しかし、ここに興味深い事実がある。それは阿川弘之の『山本五十六』におけるものである。要約を掲げよう。

旧大日本帝国の海軍航空隊では東京帝国大学の心理学研究室に依頼して、パイロットの適性検査をしていた。1919 年ごろの話である。当時、東京の越中島に東京帝大の付属航空研究所があつて、そのなかに航空心理部が設置されていた。松本亦太郎・田中寛一・寺沢巖男・増田惟茂たちがその中心になっている。これら実験心理学の専門家が考案した適性検査はおおむね次のようなものであった。

(a) 椅子に坐つて手もとにある紐を操作すると、約 5 メートル先にあるテーブルの上を 2 本の棒が往復する。左右の棒がびたりと並行したところで止める。2, 3 cm の誤差は許されるが、それ以上の誤差が生じた場合は不適格になる（興行知覚）。

(b) 回転椅子がぐるぐる激しく回される。回転が止まるやいなや椅子から飛び出して直立する。ぐらつきがひどい人は不適格になる（平衡感覚）。

(c) 左右に傾斜する板の上に立たされ、どの程度の傾斜まで落下しないで耐えられるか、どうか測定される。耐えられた角度によって適性の有無が判定される（平衡感覚）。

(d) 床に引いてある白い直線の上を目かくししたままで歩く。白線を大幅に外れると不適格になる（方向知覚）。

(e) 多数の赤・青の色電球が並んでいて、それがせわしく点滅する。あとで、赤や青の点滅数を報告する。誤差の数によって適性の有無が判定される（反応時間）。

これらは動作検査であるが、このほかにも紙筆検査といわれるものもある²²⁾。この 5 種類の動作検査はパイロットの適性検査として確かに首肯できるものであるが、このような適性検査で合格した人たちがパイロットになっても成績は必ずしもよくなく、事故が頻発し、死傷者が目立っていたのである。そこで、当時、海軍航空本部の教育部長だった大西滝治郎が航空本部長の山本五十六に相談して水野義人という古い師を連れてきて適性診断をさせることになる。これがすばらしい確率で当たっていくのである。どうしてこのようなことが起こるのであろうか、どうしてこのような人が存在するのであろうか。わ

たくしはすべての超常現象を信頼するわけではないが、事実は事実として容認しなければならないと思う。

さらに阿川は海軍予備学生を描いた『暗い波濤』で、大学のとき陸上競技をやっていた男と、弁護士になろうとして勉強していた男のパイロット適性に触れている。2 人ともに厳しい適性検査に合格していたのに、飛行機の操縦においては前者は敏捷で、後者は鈍重、しかも無器用だったのである。

阿川弘之があげた 2 件のケースは、要素的な人間観よりも全体的な人間観の重要性を示唆している。心理学者よりも大企業の人事課の人たちのほうが優れた洞察の眼を持っていることが多い。心理学者はやたらに分析を好んでいるが、もっと全体を把握することが必要であろう。

VI 心理学 vs 血液型人間学

心理学で使われている検査は標準検査と呼ばれるものである。その標準化の過程自体はしっかりしたものであろうか。すでに触れている Y-G 検査（大学生・一般成人用）は、1957 年に男子学生 4136 人、女子学生 1974 人によって標準化されている。全国規模の標準化である。しかし、もう古い検査になっている。性格検査にせよ、知能検査にせよ、標準化の作業は経済的な制約がある。優れた検査を作成するために出版元も努力すべきであろう。

わが国の標準検査が外国の心理学者の名前を付けたがるのも、日本人の舶来好みの他に、権威を海外に求める学界の後進性に根ざしている。ある有名な不安検査（1960 年版）の監修者は次のように述べている。

テスト氾濫の今の日本には、あちらのテストをチョロチョロと翻訳日本化してすましている仁もないではないが、そんな軽薄なテストは無い方が人の為になる（筆者の誤字は訂正してある）。

わたくしは、この検査も無いほうが人のためになるもののなかに入と思う。ある研究者がこの不安検査を多数の学生に実施し因子分析をしたところ、不安の 5 因子は抽出されなかったのである²³⁾。これが有名な標準検査の実態である。わたくしがここで有名な——というのは原著者がアメリカの超有名な心理学者ということだけなのである。この心理学者は性格検査のなかに「知能（高知能 — 低知能）」

を含めたアイディアマンではあるが、*stardust* のような因子を並べて研究者を困惑させている。

質問紙の標準化にも多くの問題があるが、投影法の標準化にもさまざまな問題がある。それは主として妥当性に関連している。わたくしがかつていた大学でロールシャッハ検査の達人といわれる人たちが学生たちを診てくれた。その1週間後、ある学生が精神錯乱を起こし器物を破壊しはじめた。もちろん即刻入院することになったが、ロールシャッハ検査にはなんらの徴候も現われていなかったのである。

ロールシャッハ検査に熟達するにはなん年かかるかわからないそうであるが、あまりにも権威化するのは好ましいことではないと思う。TAT, HTP, バウムなどのような投影法や箱庭療法などにおいても同じことがいえる。これらの技法についての細かい診断を記述した専門書が普通の書店の店頭に並んでいるが、これも好ましいことではない。かつてデパートの玩具売場に「ビネー検査」があったのには驚嘆してしまった。「心理学者の倫理規準」とともに、業者関係の倫理規準も考えるべきであろう。

心理学者における多くの良心的な心理検査が科学的になろうとして迂路を曲折しているすきに、捷路を駆け抜けているものがある。能見正比古たちの「血液型性格診断」である。わたくしが能見の「血液型人間学」にメスを入れたのは積極的な意欲からではなく、1990年に刊行した『血液型と性格』の「あとがき」にも認めたとおりきわめて消極的なものであった。なぜなら、そのころ「血液型と性格」の問題にアプローチするのは、二の足を踏む時代だったからである。それでも1984年9月に富士短期大学で開催された日本応用心理学会第51回大会で「血液型性格学は信頼できるか」を皮切りに、現在までに15回の発表を進めている。最近、専門外の人たちが誤謬に満ちた批判を満載した書籍²⁴⁾を著述・刊行したが、わたくしはまったく問題にしない。

能見正比古は古川竹二の『血液型と気質』²⁵⁾や目黒宏次・澄子の『気質と血液型』²⁶⁾をベースにして砂上楼阁的な偽科学を建設したが、彼が述べているすべてが誤謬とはいえない。「他山の石をもって玉を攻むべし」という理諺の通りである。

能見は次のように記述している²⁷⁾。

断定できることは、今や血液型と人間性とのあい

だに大きな関係の実在することが、一点の疑う余地なく実証されたということである。史上初めて人間の行動に科学的な基準が与えられたのだ。

心理学は、部分的には自然科学的な実験方法を採用しているが中心思想は科学ではない。極端に言えば、心理学者の数だけ心理学は存在する。もし、物理学が、甲氏の物理学と乙教授の物理学とが違っていたら科学の名に値しなくなる。心理学は、まだ、万人共通の客観性を持たない主観の学なのだ。

能見正比古の視野狭窄にもおどろかされるが正比古の跡を継いだ能見俊賢は次のように述べている²⁸⁾。

とにかく、いままでだれも比較対象として考えなかった血液型と人間の行動性・社会の現象のあいだにこんなふうに偏りが出ました。どんな意味があるんだろう、ともに考えたい、調査していきましょう、こういうテーゼを出しているんであってね。なにかが決まったなんて誰もいっていないし、いえる時点でもないし……。

親と子はこのように断絶している。そのような市井の研究者の心理学批判であるが、耳を傾ける必要があるとわたくしは主張したのである。

血液型性格診断とともに巷間で人気があるのは、「ココロロジー・テスト（雑誌心理テスト）」である。正規の心理学者が作成している場合もあるが、多くは心理学的な学習をした人たちが作成している。わたくしと浮谷秀一はこの「ココロロジー・テスト」について研究したが、次のような結果を得ている²⁹⁾。

(a) 質問紙形式のココロロジー・テストにおいては学生の認知的適合感³⁰⁾は81.5%に達している。この検査の偽物を作成して学生に渡しても認知的適合感³¹⁾はほとんど変わらない82.7%になっている。このような検査でもほとんどの人が「当たっている」という認知を持つのである。

(b) 投影法形式のココロロジー・テストでは認知的適合感³²⁾の比率はかなり低下してしまうが、それでも61.4%というレベルを保持している。この検査の偽物を作成して実施してみても認知的適合感³³⁾は56.2%である。わたくしたちの標準検査に対する認知的適合感³⁴⁾はどうであろうか。

わたくしたちの周辺に、血液型性格診断とか、ココロロジー・テストとかいうものがひしめいていて、わたくしたちはそれらと当分のあいだ、いや半永久

的に共存していかなければならないのである。

結 語

1987年3月17日、「日本学術会議」の会議室で心理学研究連絡委員会で企画したシンポジウム「人間理解の交差点」(企画:学習院大学 永田良昭教授)が開催された。わたくしは「心理学における基礎と応用」に出席し、「心理学の歴史を回顧すると応用が先にあって基礎がそれに続いた」という所説を発表した。心理学は1879年以降、法則性の追求に努力を重ねることになってしまったが、応用は規則性の発見に先だってフロントにあったのである。フロント、すなわち、最前線は複雑な社会面と密接に関係している。苦悩は日常の茶飯事である。ここでは「応用心理学の研究領域におけるアナクロニズムとシンクロニズム」と題して、わたくし自身の心のなかにおけるコンフリクトを描写してみた。自己矛盾に陥っているところも多く見られる。それでは、おかしいのだと思っている気持のコンフリクトもある。ここに、これだけ書いてしまうと一種のカタルシスになってしまうかもしれない。そういう安堵感がすべてを停滞させているのかもしれない。

最近、主として病院やクリニックにおけるテストやカウンセリングで活動したいという欲求もあって、大学院に進学してくる学生が多くなっている。心理学専攻者の職場はそういう領域だけではないので考えさせられる問題である。それは一部の若い心理学専攻者が抱いている基本的な劣等感に基づいているのかもしれない。最後に1つのアドバイスとして、G. W. Allport の“Pattern and Growth in Personality” (1961) の一説を原文のまま掲げておくことにしよう。

The point at issue (note: Statistical forecasting which applies only to groups of people and not to individuals.) was once expressed by Sherlock Holmes, who said to his friend Dr. Watson: “While the individual man is an insoluble puzzle, in the aggregate he becomes a mathematical certainty. You can never foretell what any one man will do, but you can say with precision what an average number will be up to. Individuals vary but percentages remain constant.”

The true goal of clinical psychology is not to predict the aggregate, but to foretell “what any one man will do.” In reaching this ideal, actuarial prediction may sometimes help, universal and group norms are useful, but they do not go the whole distance.

注釈・文献

- 1) 『日本心理学会第22回大会発表論文集』所載のものであるが、現在のようなオフセット印刷ではないので誤植が数多く見られる。
- 2) personality と Persönlichkeit とは異なる。personality change と Persönlichkeitveränderung とは同義語ではない。
- 3) 渡邊芳之・佐藤達哉『性格は変わる、変えられる』(自由国民社、1996)。
- 4) 渡邊徹『人格論』(精美堂、1912、明治45年)。
- 5) 北村・安倍・黒田(編)『千葉胤成著作集2 無意識の心理学』(協同出版、1972)。
- 6) ローマの政治家。「どうして仮面のようにして歩きまわらなければならないのか」ということばを残している。
- 7) ユングはベルソナを自我から湧き起こってくる社会的な仮面と見ている。
- 8) これは「日本心理学会第61回大会」の会場(関西学院大学、1997)において配布したものの複製である。当時の発表は大村・浮谷「J.G. Frederickの情動年齢(EA)についての研究」である。
- 9) このあとサーストン(L.L. Thurstone)夫妻による『神経質検査(Neurotic Inventory)』が続いている。この種の検査はアメリカ好みのものである。
- 10) 検査の名称をそのまま検査の表紙に記載しなくてはならないという規定はない。わが国にはかつて『非行化傾向早期発見検査』というとんでもない名称の検査が販売されていた。
- 11) ある学術誌の編集委員長に「おかしい」とアドバイスしたところ、APAの学術誌でもやっているという返事がもどってきた。また、ある編集委員会からは応答がなかった。
- 12) 岩原信九郎『教育と心理のための統計学』(日本文化科学社、1965)。
- 13) 推計学は、大手(追手)から突入する論法ではなく、搦手から侵入する論法を使っている。帰無仮説をある危険率(α)のもとで棄却していくのである。
- 14) 年間の平均温度が2、3度違っていたら農産物の出来高に大差が出る。性格検査、知能検査、学力検査の平均点における2、3点は問題にならない。
- 15) わが国では外来文化摂取派が正統派である。

- 16) G. W. Allport, P. E. Vernon, & G. Lindzey: Study of Values. 1951 がそれである。
- 17) 成田勝郎・鰭崎轍による『心情質問法（情意徴標問診法）』がそれである。
- 18) 知能検査も1校時以内で終了しなければ利用されないものである。容量は要領に通じるのである。
- 19) 渡邊徹は田中寛一・本田親二・小保内虎夫とともに1925年3月にわが国最初の進学適性検査を実施している（日本大学）。渡邊の弟子の安藤公平の著書に『進学適性検査の解説』（旺文社、1948）がある。
- 20) 大村・花沢成一・佐藤誠共著『新訂・心理検査の理論と実際』（駿河台出版社、1985）。
- 21) 問題になったのは17) にあげられている問診法である。この問診法は、安藤公平・大村・花沢共著の『心理検査の理論と実際』の初版（駿河台出版社、1967）に掲載されている。
- 22) 紙筆検査のなかには複雑な地図状の図形中から指示された場所を発見するものも含まれている。
- 23) 自我統御力の欠如・自我の弱さ・パラノイド傾向・罪悪感・衝動による緊迫の5因子。
- 24) 前川輝光の『血液型人間学』（松籟社、1998）など。
- 25) 古川竹二『血液型と気質』（三省堂、1932）。
- 26) 目黒宏次・澄子『気質と血液型』（現代心理研究会、1970）。これはいわゆる私家版である。
- 27) 能見正比古『新・血液型人間学』（角川書店、1983）。
- 28) 大西赤人『血液型の迷路』（朝日新聞社、1986）。この能見俊賢の意見は大西との対話のなかのものである。
- 29) 大村「性格検査の妥当性とはなんだろう？——ココロロジー現象の流行に関連して——」（日本大学人文科学研究所『研究紀要』No.44, 1992）。大村・浮谷の「ココロロジー現象」に関する研究は『日本性格心理学会第2回～第4回大会発表論文集』（1993～1995）を参照してほしい。

（平成12年2月1日）